

看護管理者として挑戦しつづける原点

白井麻希

第一看護学科 16 回生

看護学生、寮生活を体験した3年間に、私の人生観や看護観・管理観の原点があります。私は今年、認定看護管理者の5年更新を終えました。認定看護管理者を取得した道のりを振り返る時、ある体験が重なります。

その道のりの過程にある研修前の書類選考で通りませんでした。とても悔しく、自分は何をしたくて受講にチャレンジしたのか、認定看護管理者の使命・役割を担えるのか、本気で認定看護管理者になりたいのかなれるのか、と自分と向き合いました。

同時に、看護学生時代の体験を思い出しました。学生寮に入っており、夜間、寮母さんから隣の病院で人手を探しているから応援に行くよう一斉放送がありました。病院では、大量の輸血を必要としていました。駆けつけてくださるボランティアの方の血液型を確認後、輸血用採血をしていました。学生の私は、献血量が200mlになったら看護師に伝え、その間ボランティアの方に声を掛けることしかできませんでした。その時、「誰かはわからないですが、自分から取り出した200mlの血液でその方が助かるといいですね」と言われたことです。

自分と向き合う時、なぜこのシーンが蘇ったのかと熟考を重ねました。人が人を助けようとする思いを代弁することも看護師が示す姿勢は沢山あり、それを現実にしていくことが看護管理者であり、自分が挑戦する部分なのかもしれないと思いはじめた訳です。

勿論、熱い気持ちだけでは看護管理者にはなれません。良いも悪いも経験や実績を重ね成果を残す必要があり、課題は山積みです。本気でやるのかやらないのかを、自問自答するようになり、やりたいなら覚悟を持ってやる!!!という挑戦し続ける信条の原点に、この体験があると感じています。看護管理者として自らを奮い立たせる時に思い出すシーンが看護学生時代です。私の看護学生3年間に乾杯!!!!